

「ご<漢語>して下さい」「ご<漢語>される」 等の誤用について

坂 本 恵

はじめに

最近、「ご使用して下さい」「ご参加して下さい」、また、「ご活用される」「ご利用される」、さらには「ご乗車できます」等の誤用を非常に多く見かける。これらは敬語の用法から見てまったく誤った使い方であるにもかかわらず、一般には誤用の意識は少ないと見られ、使用例も増加の一途をたどっている。これらの誤用について考えてみたい。

1 誤用の実体

「お／ご～する」は「お持ちする」「ご説明する」など、「～」の部分に「お」の場合動詞の連用形、「ご」の場合はサ変動詞の漢語部分を入れて、その動作をする人物から見てその動作を受ける人物に対して配慮を表す「間接尊重語」（いわゆる「謙譲語」）（注1）の典型的な形式である。従って、「あなたから先生に対して「ご説明して下さい」「」などという場合は正しい使い方となる。あなたから見て先生に対し配慮を表した上で、話し手の立場からあなたに対して「下さる」を使い配慮しているという構造である。しかし昨今目に付く誤用はこの構造で使われたものではなく、ただ単に、相手に対して配慮を表す「直接尊重語」（いわゆる「尊敬語」）として使われているものである。直接尊重語（尊敬語）としてであれば、「ご使用下さい」あるいは「使用して下さい」、「ご参加下さい」「参加して下さい」などが正しい形となる。この誤用は漢語サ変動詞において多く見られるが、それ以外の動詞であれば「お持ちして下さい」という形を相手に対する配慮を表す直接尊重語（尊敬語）として使っていることになる。実際にはこの形での誤用もあるようであるが、この形でなら違和感を覚える人でも、「ご使用して下さい」などは誤用と認識していないのが現実であろう。

「ご利用される」などの誤用も同様に、「ご<漢語>する」という間接尊重語（謙譲語）の形式に、「れる、られる」という典型的な直接尊重語（尊敬語）の

うち「サ変動詞」に接続する「れる」を下接させたもので、直接尊重語（尊敬語）と間接尊重語（謙讓語）の混用という典型的な誤用であるといえる。漢語のサ変動詞の場合、「ごく漢語>なさる」という形式が直接尊重語の形式となり、「利用する」に「れる」を下接させた「利用される」という形より高い敬意を表したい時には「ご利用なさる」が使われるべきである。「利用される」に直接「ご」を接続させる形式はない。

「ご乗車できる」などの誤用の場合、実際には「ご～できる」という敬語の形式はなく、これは、「ご～する」という間接尊重語（謙讓語）の「する」の部分で「できる」にして可能を表したもので、間接尊重語（謙讓語）の形式と考えられる。（私があなたに対して）「うまくご説明できるかと思います」などの形であれば正しい使い方となる。正しい可能の形としては、「お～になれる」（「ご乗車になれる」など）や、「お／ご～いただける」（「ご乗車いただける」など）などと考えられる。

これらの誤用は誤用でありながら、現在ではそれをただすことができないほど広まっているが、それにはいくつかの原因が考えられる。なぜこれほど多く使われているのか、その理由を考えてみたい。

2 教育の問題

この誤用を誤用と認識できない理由の一つは教育の問題であろう。現在学校教育の中で敬語に関する教育はそれほど多いと言えないだろう。また、限られた人間関係の中で多様な言語使用に接していない子供たちにとって実際に敬語使用に接する場面や、自分で敬語を使う場面は少ないであろうと推察できる。現在大学に在籍している学生たちの中にも、教員に対しても「ですます」抜きの、いわゆる「タメ口」でしか話をしないものもいる。「ですます」を使った言葉遣いでさえ苦手な学生たちが聞いたこともない、使ったこともない言葉について、「尊敬語」「謙讓語」などの語の分類だけを学習しても、それが身に付いたものになると思えない。社会人であっても、敬語使用について自信を持っている人は少ないように見受けられる。特に世代が若くなるにつれ、使わなければならないと感じるものの、自信を持って使えないと考えている人が多いようである。（注2）敬語についての誤解の代表的なものとして、「自分側の動作、ものについて「お／ご」

を使ってはいけないのではないか」というものがある。「お／ご～する」形式の間接尊重語（謙讓語）についての認識が低いということである。この意識は、相手の動作を高めるには「お／ご」をつければよい、という意識にも結びつく。「使用して下さい」に安易に「ご」をつければ更に丁寧になるという意識が生まれるのは容易に想像できることである。

一般に「いらっしゃる」「申し上げる」（～れる／られる）のような一語で完結する、あるいはある要素を下接させるだけの形式は認識しやすく、使いやすいものであるが、「お／ご～になる」や「お／ご～なさる」「お／ご～する」といった動詞の前後につける形式の敬語は認識されにくく、誤用を生みやすいものであると言える。敬語の教育の際、これらの形式について十分な理解、さらには訓練がされていないのであろう。「お／ご～する」という形式をしっかり認識できればこの種の誤用は生まれにくいと思う。敬語の教育が「尊敬語」「謙讓語」という用語を覚えることだけに集中しているからこそこの誤用が生まれるのではないか。形式とともに、実際に使うことを念頭に置いた練習を含めた教育を行えば、誤用は少なくなるものと思われる。

3 「お／ご～する」形式の問題

「お／ご～する」形式自体にも誤用を招きやすい要素がある。現代日本語においてはもっとも典型的な間接尊重語（謙讓語）形式である「お／ご～する」ではあるが、実際には使える状況、使える動詞が非常に少ない。「（相手の荷物を）お持ちする」「（相手に迷惑を）おかけする」「（相手に）ご説明する」など、限られた使い方しかない。使える動詞がかなり限られており、間接尊重語（謙讓語）としてはかなり使いにくいものだと言える。（注3）例えば、「～してくれる／くださる」「（に）～してもらう／いただく」であれば、どんな動詞を使っても、自分側の動作によって動作を受ける対象を上げ、配慮を表すことができる。「お／ご～する」に使える動詞には制限があり、「使用する」「参加する」などは使えない。つまり、「ご使用する」「ご参加する」といった間接尊重語（謙讓語）としての使い方はないわけである。間接尊重語（謙讓語）として使うことのできる「ご説明する」を直接尊重語（尊敬語）として使ったならば完全な誤用ということができるが、間接尊重語としての用法がないものについて直接尊重語として使

うことについては完全な誤用とは言い難いとも言える。

「お／ご～する」は以上に述べたように力の弱い敬語形式であると言え、間接尊重語としての存在感が少ないのであろう。その意味では、同様に典型的な直接尊重語形式である「お／ご～になる」も使える動詞にかなり大きな制限があり(注4)、どんな動詞にも、どのような状況においても使えるというわけではない。それに代わるべき「お／ご～なさる」形式は現在ではほとんど使われなくなり、「れる／られる」では敬意が十分でないと思われるときに、いつでも使える適当な直接尊重語の形式がない状況であることも指摘できる。「お／ご～になる」「お／ご～なさる」「お／ご～する」といった動詞の前後に付加する敬語形式についての知識が少なければ、ただ単に動詞に「お／ご」をつける形式が安易に選択されることも理解できる。特に和語動詞に「お」をつけて「お読む」などと言う形にするには抵抗があっても、漢語動詞に「ご」をつけて「ご使用する」という形を作ることは抵抗が少ないだろう。以上のように、敬語形式そのものにこのような誤用を誘発する要素が見られるのである。

4 敬語の方向の問題

筆者らは(狭義)敬語の分類として直接尊重語、間接尊重語、丁重語、丁重尊重語、美化語、尊卑語、文体敬語の7分類を提唱している。(注5)それは、そのように分類することにより、現在における敬語の用法がよりわかりやすくなり、現状をよく反映することになると考えるからである。尊敬語、謙譲語、丁寧語という従来の3分法に丁重語、美化語を加えた5分類が現在研究者の間では一般的であるといえるが、それを更に整備し、誤解を招く用語を変更したものである。この分類では、従来の3分類の「謙譲語」を、動作の対象を上げる働きを持つ「間接尊重語」と、動作主を上げない働きと場に配慮する働きを持つ「丁重語」に分離し、また、「丁寧語」を性質のまったく異なる「です」「ます」などの文体敬語と言葉を飾る働きを持つ「美化語」に分離し、更に、「貴社」「弊社」など相手と自分のみに関わる敬語を「尊卑語」とした。

そこで見てきたことは、従来の3分法では遠い位置に存在している「尊敬語」「謙譲語」が、「尊敬語→直接尊重語」と、「謙譲語」から丁重語を分離した「間接尊重語」、この二つの「尊重語」系が、どちらも直接に上げるべき相手を上げ

る、間接的に自分の動作を通じて相手を上げるという意味で、対象となる人を上げるという共通の働きがあることがよく見えるようになったということである。共通の働きではあるが、表し方が表からと裏からというように異なっているということである。現在の敬語使用の状況を考えると、この二者の働きが近づいてきていることがわかる。「ごく漢語>する」を直接尊重語として使う使い方もこの一例で、どのような手段を使うかは別として、とにかく上げるべき相手を上げたいという気持ちから使われているものと考えられる。直接尊重語、間接尊重語が近づいてきている一つの例とともらえることができる。その意味では、この誤用は誤用の域を脱して、新しい形の敬語形式となる可能性もあると言える。

5 おわりに

敬語の誤用と言う場合、形の誤用、使い方の誤用、場面にあわないなどの誤用など、いろいろなレベルのものが考えられる。形の問題はもっともわかりやすいものであり、単純な誤りとも考えられるが、ある意味では誤用は起こるべくして起こるものでもある。教育などによってこの種の誤用が減ることが望ましいが、敬語は特に大人になってから身につけるものであり、それなかなか難しい問題である。いわゆる「ら抜き言葉」のように、言語の大きな流れによって生じる問題（注6）もあるが、この「ご～する」に関する誤用については元々はよく知らないことから起こっているもので、同一には論じられない。しかし、それもまた、言語の流れにあるものかとも考えられないこともない。どのように改めるか、あるいはこのまま放置して新しい形式となるのを黙認していくしかないのかを含め、難しい問題ではある。

注1 敬語の分類は『敬語表現』による。参考のため、（ ）に従来の分類によるものもあげた。蒲谷宏・川口義一・坂本恵1998『敬語表現』（大修館書店）

注2 文化庁の世論調査などによる

注3 蒲谷宏1992「『お・ご～する』に関する一考察」『辻村敏樹教授古希記念日本語史の諸問題』（明治書院）

注4 坂本恵1992「『お～になる』と『れる・られる』」『国語学 研究と資料 16』（国語学研究と資料の会）

注5 前掲『敬語表現』

注6 いわゆる「ら抜き言葉」は、5段型動詞では完了した「れる・られる」から可能の用法を除き、可能動詞を作るという日本語史上の流れが1段型動詞で進行している動きであり、歴史の流れを考えるととめることのできない自然な流れであり、誤用と排除することはできない。